A TREASURY OF JAPANESE LITERATURE

日本の文学

53

井伏鱒二

中央公論社

日本の文学　53
©1966

井伏鱒二

昭和41年10月25日初版印刷
昭和41年11月5日初版発行　　価390円

発行者　宮本信太郎

本文整版印刷　三晃印刷株式会社
扉・函貼印刷　東京プロセス株式会社
色刷口絵印刷　株式会社大熊整美堂
口絵写真印刷　東京プロセス株式会社
本文用紙　本州製紙株式会社
クロス　日本クロス工業株式会社
製函　加藤製函印刷株式会社
函ボール　佐賀板紙株式会社
製本　小泉製本株式会社

発行所　中央公論社

東京都中央区京橋2丁目1番地
電話(561)5921(代)　振替東京34

目次

山椒魚　5
鯉　12
丹下氏邸　17
さざなみ軍記　29
集金旅行　103
ジョン万次郎漂流記　146
多甚古村　199
へんろう宿　271
二つの話　276
追剝の話　314

白毛 328
遙拝隊長 339
かきつばた 361
開墾村の与作 376
珍品堂主人 389
コタツ花 475
注解 493
解説 河盛好蔵 504
年譜 518
口絵 川上澄生 「ジョン万次郎漂流記」
挿画 川上澄生

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongb

井伏鱒二

山椒魚

*山椒魚は悲しんだ。

彼は彼の棲家である岩屋から外へ出てみようとしたのであるが、頭が出口につかえて外に出ることができなかったのである。今はもはや、彼にとって永遠の棲家である岩屋は、出入口のところがそんなに狭かった。そして、ほの暗かった。強いて出て行こうとこころみると、彼の頭は出入口を塞ぐコロップの栓となるにすぎなくて、それはまる二年の間に彼の体が発育した証拠にこそはなったが、彼を狼狽させかつ悲しませるには十分であったのだ。

「何たる失策であることか！」

彼は岩屋のなかを許されるかぎり広く泳ぎまわってみようとした。人々は思いぞ屈せし場合、部屋のなかをしばしばこんな工合に歩きまわるものである。けれど山椒魚の棲家は、泳ぎまわるべくあまりに広くなかった。彼は体を前後左右に動かすことができただけである。その結果、岩屋の壁は水あかにまみれて滑かに感触され、彼は彼自身の背中や尻尾や腹に、ついに苔が生えてしまったと信じた。彼は深い歎息をもらしたが、あたかも一つの決心がついたかのごとく呟いた。

「いよいよ出られないというならば、俺にも相当な考えがあるんだ。」

しかし、彼に何一つとしてうまい考えがある道理はなかったのである。

岩屋の天井には、杉苔と銭苔とが密生して、銭苔は緑色の鱗でもって地所とり（小児の遊戯の一種）の形式で繁殖し、杉苔は最も細くかつ紅色の花柄の尖端に、可憐な花を咲かせた。可憐な花は可憐な実を結び、それは隠花植物の種子散布の法則通り、間もなく花粉を散らしはじめた。

山椒魚は、杉苔や銭苔を眺めることを好まなかった。むしろそれらを疎んじさえした。杉苔の花粉はしきりに岩屋のなかの水面に散ったので、彼は自分の棲家の水が汚れてしまうと信じたからである。あまつさえ岩や天井の凹みには、一群ずつの黴さえも生えた。黴は何と愚かな習性を持っていたことであろう。常に消えたり生えたりして、絶対に繁殖して行こうとする意志はないかのようであった。山椒魚は岩屋の出入口に顔をくっつけて、

岩屋の外の光景を眺めることを好んだのである。ほの暗い場所から明るい場所をのぞき見することは、これは興味深いことではないか。そして小さな窓からのぞき見するときほど、常に多くの物を見ることはできないのである。

谷川というものは、めちゃくちゃな急流となって流れ去ったり、意外なところで大きな淀みをつくっているものらしい。山椒魚は岩屋の出入口から、谷川の大きな淀みを眺めることができた。そこでは水底に生えた一叢の藻が朗かな発育を遂げて、一本ずつの細い茎でもって水底から水面まで一直線に伸びていた。そして水面に達すると突然その発育を中止して、水面から空中に藻の花をのぞかせているのである。多くの目高たちは、藻の茎の間を泳ぎぬけることを好んだらしく、彼らは茎の林のなかに群をつくって、互いに流れに押し流されまいと努力した。そして彼らの一群は右によろめいたり左によろめいたりして、彼らのうちのある一ぴきが誤って左によろめくと、他の多くのものは他のものに後れまいとして一せいに左によろめいた。もしある一ぴきが藻の茎に邪魔されて右によろめかなければならなかったとすれば、他の多くの小魚たちはことごとく、ここを先途と右によろめいた。それゆえ、彼らのうちのある一ぴきだけが、他の多くの仲間から自由に遁走して行くことははなはだ困難であるらしかった。

山椒魚はこれらの小魚たちを眺めながら、彼らを嘲笑してしまった。

「なんという不自由千万な奴らであろう！」

淀みの水面は絶えず緩慢な渦を描いていた。それは水面に散った一片の白い花弁によって証明できるであろう。白い花弁は淀みの水面に広く円周を描きながら、その円周を次第に小さくして行った。そして速力をはやめた。最後に、きわめて小さな円周を描いたが、その円周の中心点において、花弁自体は水のなかに吸いこまれてしまった。

山椒魚は今にも目がくらみそうだと呟いた。

ある夜、一ぴきの小蝦が岩屋のなかへまぎれ込んだ。この小動物は今や産卵期のまっただなかにあるらしく、透明な腹部一ぱいにあたかも雀の稗草の種子に似た卵を抱えて、岩壁にすがりついた。そうして細長いその終りを見届けることができないように消えている触手をふり動かしていたが、いかなる料簡であるか彼は岩壁から跳びのき、二三回ほど巧みな宙返りをこころみて、今度は山椒魚の横っ腹にすがりついた。

山椒魚は小蝦がそこで何をしているのか、ふりむいて見てやりたい衝動を覚えたが、彼は我慢した。ほんの少

しでも彼が体を動かせば、この小動物は驚いて逃げ去ってしまったであろう。

「だが、このみもちの虫けら同然のやつは、一たいここで何をしているのだろう？」

この一ぴきの蝦は山椒魚の横腹を岩石だと思い込んで、そこに卵を産みつけていたのに相違ない。さもなければ、何か一生懸命に物思いに耽っていたのであろう。

山椒魚は得意げに言った。

「くったくしたり物思いに耽ったりするやつは、莫迦だよ。」

彼はどうしても岩屋の外に出なくてはならないと決心した。いつまでも考え込んでいるほど愚かなことはないではないか。今は冗談ごとの場合ではないのである。

彼は全身の力を込めて岩屋の出口に突進した。けれど彼の頭は出口の穴につかえて、そこに厳しくコロップの栓をつめる結果に終ってしまった。それゆえ、コロップを抜くためには、彼は再び全身の力を込めて、うしろに身を退かなければならなかったのである。

この騒ぎのため、岩屋のなかではおびただしく水が濁り、小蝦の狼狽といっては並たいていではなかった。けれど小蝦は、彼が岩石であろうと信じていた棍棒の一端がいきなりコロップの栓となったり抜けたりした光景に、ひどく失笑してしまった。全く蝦くらい濁った水のなかでよく笑う生物はいないのである。

山椒魚は再びこころみた。それは再び徒労に終った。何としても彼の頭は穴につかえたのである。

彼の目から涙がながれた。

「ああ神様！　あなたはなさけないことをなさいます。たった二年間ほど私がうっかりしていたのに、その罰として、一生涯この　窖に私を閉じこめてしまうとは横暴であります。私は今にも気が狂いそうです。」

諸君は、発狂した山椒魚を見たことはないであろうが、この山椒魚にいくらかその傾向がなかったとは誰がいえよう。諸君は、この山椒魚を嘲笑してはいけない。すでに彼が飽きるほど暗黒の浴槽につかりすぎて、もはやまんがならないでいるのを、諒解してやらなければならない。いかなる癲癇病者も、自分の幽閉されている部屋から解放してもらいたいと絶えず願っているではないか。最も人間嫌いな囚人でさえも、これと同じことを欲しているではないか。

「ああ神様、どうして私だけがこんなにやくざな身の上でなければならないのです？」

岩屋の外では、水面に大小二ひきの水すましが遊んでいた。彼らは小なるものが大なるものの背中に乗っかり、彼らは唐突な蛙の出現に驚かされて、直線をでたらめに

折りまげた形に逃げまわった。蛙は水底から水面にむかって勢いよく律をつくって突進したが、その三角形の鼻先を空中に現わすと、水底にむかって再び突進したのである。

山椒魚はこれらの活溌な動作と光景とを感動の瞳で眺めていたが、やがて彼は自分を感動させるものから、むしろ目を避けた方がいいということに気がついた。彼は目を閉じてみた。悲しかった。彼は彼自身のことをたとえばブリキの切屑であると思ったのである。

誰しも自分自身をあまり愚かな言葉で譬えてみることは好まないであろう。ただ不幸にその心をかきむしられる者のみが、自分自身はブリキの切屑だなどと考えてみる。たしかに彼らは深くふところ手をして物思いに耽ったり、手ににじんだ汗をチョッキの胴で拭ったりして、彼らほどおのおの好みのままの恰好をしがちなものはないのである。

山椒魚は閉じた目蓋を開こうとしなかった。何となれば、彼には目蓋を開いたり閉じたりする自由と、その可能とが与えられていただけであったからなのだ。

その結果、彼の目蓋のなかでは、いかに合点のゆかないことが生じたではなかったか！　目を閉じるという単なる形式が巨大な暗やみを決定してみせたのである。その暗やみは際限もなく拡がった深淵であった。誰しもこの深淵の深さや広さを言いあてることはできないであろう。

――どうか諸君に再びお願いがある。山椒魚がかかる常識に没頭することを軽蔑しないでいただきたい。牢獄の見張り人といえども、よほど気むずかしい時でなくては、終身懲役の囚人がいたずらに歎息をもらしたからといって叱りつけはしない。

「ああ、寒いほど独りぼっちだ！」

注意深い心の持主であるならば、山椒魚のすすり泣きの声が岩屋の外にもれているのを聞きのがしはしなかったであろう。

悲歎にくれているものを、いつまでもその状態に置いとくのは、よしわるしである。山椒魚はよくない性質を帯びて来たらしかった。そしてある日のこと、岩屋の窓からまぎれこんだ一ぴきの蛙を外に出ることができないようにした。蛙は山椒魚の頭が岩屋の窓にコロップの栓となったので、狼狽のあまり岩壁によじのぼり、天井にとびついて銭苔の鱗にすがりついた。この蛙というのは淀みの水底から水面に、水面から水底に、勢いよく往来して山椒魚を羨ましがらせたところの蛙である。誤って滑り落ちれば、そこには山椒魚の悪党が待っている。

山椒魚は相手の動物を、自分と同じ状態に置くことの

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongb

できるのが痛快であったのだ。
「一生涯ここに閉じ込めてやる！」
悪党の呪い言葉はある期間だけでも効験がある。蛙は注意深い足どりで凹みにはいった。そして彼は、これで大丈夫だと信じたので、凹みから顔だけ現わして次のように言った。
「俺は平気だ。」
「出て来い！」
と山椒魚は呶鳴った。そうして彼らは激しい口論をはじめたのである。
「出て行こうと行くまいと、こちらの勝手だ。」
「よろしい、いつまでも勝手にしろ。」
「お前は莫迦だ。」
「お前は莫迦だ。」
彼らは、かかる言葉を幾度となく繰返した。翌日も、その翌日も、同じ言葉で自分を主張し通していたわけである。

一年の月日が過ぎた。
初夏の水や温度は、岩屋の囚人たちをして鉱物から生物に蘇らせた。そこで二個の生物は、今年の夏いつぱい次のように口論しつづけたのである。山椒魚は岩屋の外に出て行くべく頭が肥大しすぎていたことを、すでに相手に見ぬかれてしまっていた。
「お前こそ頭がつかえて、そこから出て行けないだろう？」
「お前だって、そこから出ては来れまい。」
「それならば、お前から出て行ってみろ。」
「お前こそ、そこから降りて来い。」

さらに一年の月日が過ぎた。二個の鉱物は、再び二個の生物に変化した。けれど彼らは、今年の夏はお互いに黙り込んで、そしてお互いに自分の歎息が相手に聞えないように注意していたのである。
ところが山椒魚よりも先に、岩の凹みの相手は、不注意にも深い歎息をもらしてしまった。それは「あああ」という最も小さな風の音であった。去年と同じく、しきりに杉苔の花粉の散る光景が彼の歎息を唆したのである。
山椒魚がこれを聞きのがす道理はなかった。彼は上の方を見上げ、かつ友情を瞳にこめてたずねた。
「お前は、さっき大きな息をしたろう？」
相手は自分を鞭撻して答えた。
「それがどうした？」
「そんな返辞をするな。もう、そこから降りて来てもよろしい。」

「空腹で動けない。」
「それでは、もう駄目なようか？」
相手は答えた。
「もう駄目なようだ。」
よほどしばらくしてから山椒魚はたずねた。
「お前は今、どういうことを考えているようなのだろうか？」
相手はきわめて遠慮がちに答えた。
「今でもべつにお前のことをおこってはいないんだ。」

つくだ煮の小魚

ある日　雨の晴れまに
竹の皮に包んだつくだ煮が
水たまりにこぼれ落ちた
つくだ煮の小魚たちは
その一ぴき一ぴきを見てみれば
目を大きく見開いて
環になって互いにからみあっている
鰭も尻尾も折れていない
顎の呼吸するところには　色つやさえある
そして　水たまりの底に放たれたが
あめ色の小魚たちは
互いに生きて返らなんだ

――「厄よけ詩集」より

鯉

すでに十幾年前から私は一ぴきの鯉になやまされて来た。学生時代に友人青木南八（先年死去）が彼の満腔の厚意から私にこれをくれたものであるが、この鯉はよほど遠い在所の池から獲って来たものであるとそのとき青木南八は私に告げた。

鯉はその当時一尺の長さで真白い色をしていた。

私が下宿の窓の欄干へハンカチを乾している時、青木南八はニウムの鍋の中に真白い一ぴきの大きな鯉を入れて、その上に藻を一ぱい覆ったのを私に進物とした。私は、彼の厚意を謝して今後決して白色の鯉を殺しはしないことを誓った。そして、私は物差しを出して来て、この魚の長さを計ったり、放魚する場所について彼と語りあったりした。

下宿の中庭に瓢箪の形をした池があって、池の中には木や竹の屑がいっぱいに散らばっていたので、私はこの中に鯉を放つのを不安に思ったが、しばらく考えた後で、やはり止むを得なかった。鯉は池の底に深く入って数週間姿を見せなかった。

その年の冬、私は素人下宿へ移った。鯉も連れて行きたかったのだが、私は網を持っていなかったので断念した。それゆえ、彼岸が過ぎてようやく魚釣ができはじめてから、私は以前の下宿の瓢箪池へ鯉を釣りに行った。最初の日、二ひきの小さな鮒を釣りあげたので、これをそこの下宿の主人に見せた。主人は釣に興味を持ってはいないらしかったが、鮒なぞがこの瓢箪池にいるとは思いがけなかったと言って、次の日からは、彼も私と並んで釣をすることにした。

ようやく八日目に、私は春蚕のさなぎ虫で、目的の鯉を釣りあげることができた。鯉は白色のまま少しも痩せてはいなかった。けれど鰭の先に透明な寄生虫を宿らせていた。私は注意深く虫を除いてから、洗面器に冷水を充たしてその中に鯉を入れた。そしてその上を無花果の葉でもって覆った。

素人下宿には瓢箪池なぞはなかった。それゆえ、私はむしろひとおもいにこいつを殺してしまってやろうかと思って、無花果の葉を幾度もつまみあげてみた。鯉はそのたびごとに口を開閉して安息な呼吸をしていた。

私は相談するために、洗面器を持って青木南八のところへ出かけた。

「君の愛人の家では泉水が広いようだが、鯉をあずかってくれないかね？」

青木南八は少しも躊躇することなく、枇杷の枝のさしかかっている池の端に私を案内した。私は鯉を池に放つ前に、たとえこの魚は彼の愛人の所有にかかる池に棲ませたにしても、魚の所有権は必ず私の方にあることを力説した。私のこの言葉をむしろ青木南八は、彼に対しての追従だと思ったらしく、彼は疎ましい顔色をした。何となれば私はこの魚を大事にすることを、かつて彼に誓ったことがあったからである。

鯉は私の洗面器の水とともに池の中に深く入った。

それから六年目の初夏、青木南八は死去した。

私はしばしば彼の病気を見舞っていたのであるが、彼の病気が重いなぞとは少しも思っていなかった。むしろ彼が散歩にもつきあわないのをもどかしく思ったり、彼の枕元で莫を喫ったりした。

私は博覧会の台湾館で、大小二十四個の花をつけたシャボテンを買って、持って行って青木に贈ることにした。ところが彼の家にその鉢を持って行った日に、彼は亡くなったのである。玄関の前に立って幾度もベルを鳴らすと、彼の母親が出て来たのであるが、彼女は私の顔を見ると同時に涙を激しく流しはじめるばかりで、少しも埒があかなかったので、のみならず土間にはいくつもの靴とともに、青木の愛人が常々はいていた可憐な女靴が急ぎ足に脱いであったので、私はシャボテンの鉢を小縁の上に置いて帰って来た。

二三日して彼の告別式の日には、亡き彼の柩の上に、彼の常々かぶっていたおしる粉色の角帽と並べて私の贈ったシャボテンの鉢が置いてあった。私は一刻も早く彼の愛人の家の泉水から白色の鯉を持って帰りたいと思った。青木南八が私に対して疎ましい顔色をしたのは、かつて鯉のことについて一度だけであったからである。

私は決心して青木の愛人に手紙を送った。（青木の霊魂が私を誤解してはいけないので、ここに手紙の全文を複写する。）

謹啓。青木南八君の御逝去、謹而弔問仕ります。却説六年以前青木君を介して小生所有の鯉（白色にして当時一尺有余）一尾を貴殿邸内の泉水におあずけいたしましたが、このたびなにとぞ御返し下されたく御願い申します。ついては来たる日曜、晴雨にかかわらず午前中より貴殿邸内の池畔に釣糸を垂れることをば御許可下されたく、なおそのため早朝より裏門を少々御開きおきのほど願います。

頓首

——返事が来た。（青木の霊魂が彼の愛人を誤解してはいけないので、ここにその全文を記載してみる。）

御手紙拝見いたしました。葬いがあって間もなく魚を釣るなぞとおっしゃるのは少し乱暴かとも存じますが、よほどお大事なものと拝しますれば、御申越しの趣承知いたします。べつにお目にかかったり御挨拶に出たりはしませんが、御遠慮なく魚だけはお釣り下さいまし。

草々

日曜の早朝、私は弁当ならびに釣竿、餌、洗面器を携えて、故青木南八の愛人の邸内に忍び込んだ。そして私は少なからず興奮していた。もしもの証拠に手紙の返事を持って来ればよかったのである。

枇杷の実はすでに黄色に熟していて、新鮮な食欲をそそった。のみならず池畔の種々なる草木は全く深く繁って、二階の窓からも露台の上からも私の姿を見えなくしていることに気がついたので、私は釣竿を逆さにして枇杷の実をたたき落した。ところが鯉は夕暮れ近くなって釣ることができたので、つまり私は随分多くの枇杷の実を無断で食べてしまったわけである。

私は鯉を早稲田大学のプールに放った。

夏が来て学生たちはプールで泳ぎはじめた。私は毎日午後になるとプールの見物に通って、囲いの金網に顔を寄せながら彼らの巧妙な水泳ぶりに感心した。私はもはや失職していたので、この見物は私にとって最も適切なものであった。——日没近くなると学生たちは水からあがって、裸体のままで漆の木の下に寝ころんだり、また彼らは莨を喫ったり談笑したりする。私は彼らの健康な肢体と朗かな水泳の風景とを眺めて、深い嘆息をもらしたことがしばしばであったのだ。

学生たちがもはやむらきに水へとびこまなくなると、プールの水面は一段と静かになる。そしてすぐさま燕が数羽水面にとび来たって、ひるがえったり腹を水面にかすめたりする。けれど私の白色の鯉は深く沈んでいて、姿を見せはしない。あるいは水底で死んでしまっているのかもわからないのである。

ある夜、あまりむし暑いので私は夜明けまで眠れなかった。それゆえ、朝のすがすがしい空気を吸おうと思って、プールのあたりを歩きまわった。こんな場合には誰しも、自分はひどく孤独であると考えたり働かなければいけないと思ったり、あるいはふところ手をして永いあいだ立ち止まったりするものである。

「鯉が！」

この時、私の白色の鯉が、まことにめざましくプールの水面近くを泳ぎまわっているのを私は発見したのである。私は足音を忍ばせて金網の中に入って行って、仔細に眺めようとして跳込台の上に登った。

私の鯉は、与えられただけのプールの広さを巧みにひ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongb